The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞岡﨑友子著『日本語指示詞の歴史的研究』
Author(s)	藤本, 真理子
Citation	語文. 2011, 96, p. 76-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69177
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

岡﨑友子著『日本語指示詞の歴史的研究』

藤　本　真　理　子

本書は、岡﨑氏の博士論文『古代指示副詞の研究』（平成一五年度）およびその後、執筆された論文数本を著書にまとめたものである。

先の博士論文の題目からも分かるように、著者の関心は指示詞の中でも特に「コウ・ソウ・アア」などの指示副詞から始まっている。古くは「カク・サ」という二系列から成る指示副詞は、指示代名詞に比べて歴史的に大きく変化しているため、これまでの指示詞研究において周辺的なものとして扱われてきた。このような指示副詞の歴史的変遷を中心に据えた本書の構成は、【序章「はじめに」、第一章「指示副詞研究の導入」、第二章「現代語の指示副詞―指示用法と副詞的用法」、第三章「語彙から見た指示副詞の歴史的変化について」、第四章「指示用法から見た指示副詞の歴史的変化について」、第五章「副詞的な機能から見た指示副詞の歴史的変化について」、第六章「程度・量の大きさを表す指示副詞について」、第七章「ソ系（列）・サ系列の感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について」、第八章「「コソアで指示する」ということ」、第九章「今後の指示詞研究について」、結語「指示副詞の歴史的研究にあたって」】である。

本書の基本的な用語については、第一章で指示用法（指示詞の指示対象による分類）・副詞的用法（統語論的な働きによる分類、および表す意味による分類）のそれぞれが導入されている。一部用法は第八章にも詳しい。

さて著者は、指示副詞研究の遅れの原因を、「何かを指示する」ダイクシスであり、かつ「用言に係る」副詞であるという指示副詞のもつ二重性にあると分析しており、第二章から第六章までは、その二つの問題点に答える形で、各時代の資料に見られる指示副詞の具体的な形式を考察し、指示体系の転換期が中世後期であることを示した。また従来の近称・中称・遠称という分類だけでは整理しきれなかった古代語の指示詞に対して、直示・照応・観念用法という指示用法からの考察をおこなうことにより、指示副詞を含めた指示体系全体の指示用法の歴史的変化を明らかにしている（第四章）。これにより、上代・中古から指示副詞のカク系列・サ系列が指示代名詞のコ系・ソ系と関わりながら、現代語のコ・ソ・アの体系へと移行してきた様を知ることができる。

第七章から第九章にかけては、指示詞全体を捉える視点から、ダイクシスの定義（第八章）や「サテ」という接続詞の接続詞的用法と副詞的用法（第九章）などにも話が広がる。中でも、語や用法の周辺と中心との連続性に目をくばり、個々の形式を追いながらも体系を捉えることをめざす本書の姿勢が最も明確に伝わるのが、「それほど～ない」や「しかるべき」などの用法をもつ指示詞ソを中心に扱った第七章である。この章では、例外的な用法と考えられてきた指示詞ソの感動詞的用法、曖昧指示表現・否定

対極表現などがなぜあるのかについて、歴史的な考察を通じ、その本質的な姿を示している。このように、後半部では、古代語研究の立場からの現代語研究への提言、指示詞にとどまらず、国語学、言語学の抱える今後の課題なども述べられる。

指示副詞に端を発した氏の研究は、これまでに様々な方向性を見せており、歴史的な分析を簡易明瞭なことばで綴る内容から、今後ますます様々な研究者にも受け入れられることが予測される。そしてその成果を後押しする形で、本書は先日、金田一京助博士記念賞を受賞した。

（ひつじ書房、二〇一〇年二月、三二一頁、六，六〇〇円）

（ふじもと・まりこ　本学特任研究員）